
空しい人

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空しい人

【Nコード】

N7675Q

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

空しい人の独白のようななんだかよくわからないような。

その几帳面さと繊細さを遠くから眺め、己のだらしない様や適当という言い訳をして人間として子どもの時になりたくなかったような姿に転じていくのだろうなと思ったりしてもその自分を否定する人間にはなくなってよかった。ただ、昔から繊細さを嫌っていた。

何故かはわからない。自分に対する嫌悪かもしれないし清潔な空間をただ単に不気味に感じていただけかもしれない。汚さ、自堕落さ、そこに人間がいるような気がするという理由かもしれない。坂口安吾に影響されているのだろうか、つっても坂口安吾のことを良くわかってはいないけど。少しわかつているつもりになっているだけで。

整合されて綺麗で何もかもが完璧になっていて見落としが無くて美しすぎるほどに美しいという場所はその存在自体が素晴らしいと思うが、ただそんな空間を普段の生活に求めないのはそういう良いのもののほとんどんダメになっていく様が痛々しいのを見せ付けられるのが何か不快だからかもしれない。だけど、怠慢な様に陥るくらいだったら、やはりそういう整合されて綺麗で何もかもが完璧というような場所ほど素晴らしくて誇り高いものは無いのではな
いか、とも感じる。ただ、完璧すぎてもな、というのはその完璧を維持することにエネルギーを消費するのは辛いだろうなという感覚があるからかもしれないし、人を選んでしまうから、ということでもあるかもしれない。怠慢な様はどこか遠くにバットで打ち上げられてスタンドにぶつかって弾け飛んでしまっても良いとも思う。でも、怠慢ってどこまでが許容範囲でどこまでが許容範囲じゃないのかってのがある。そもそもその許容範囲を自分のストレスレベルで測定したらそれこそ独りよがりが過ぎる。よって怠慢を裁くことは法の下で行われるのが一番良いでしょう。そうじゃないものは全て許容範囲として受け入れないと、ただただ不愉快ばかりが募り、しかもその認められない存在が自分よりも優遇されて他者より扱われ

自分が蹴落とされた時に不愉快が爆発するかもしれない。それを避ける手段は限られてくる。もちろん、避けることは全くもって不可能ではないのだから、避けてしまえばいい。ただ、そのせいで自分の人生の形を歪に曲げられてしまったと感じてしまう理不尽が胸奥で滾るならば、その状況は即座に改善しなければ、膨らんで爆発してしまう。だから、せいぜい、爆発しない程度の不満値を胸奥で抱えながら世捨て人にでもなれば、適応できないその空しさは上にも下にも行き過ぎることはなく漂って時を過ごすかもしれない。

だけどその様は、実に怠慢かもしれない。

だから思う存分世俗に塗れて不愉快の塊として自らを墮せば何事にも動じることなくへらへらと微笑んで怠慢にならないことにだけ気をつけていればいい。何事にも動じずに墮落して怠慢にならずなっていて出来るだろうか。出来ないでしょう。知らない。

というわけで、論は簡単に結論を出さない。今日も人は曖昧なままに一つ一つを処理していく。生活のために？ 生きるために？ 死なないために？ 目標という素晴らしいもののために？ 現実を夢としてみなすことが出来れば、人は常に夢の中にここにこと笑っているかもしれない。だから夢を見るために今日も現実を否定して、自分の決定した事項のもとに自分の世界を築き上げていくソノ様。だけどそれが醜いなって語る言葉に同調をしたとき、あなたは夢にはいりこむことはできずに現実でまた漂う。その様を眺めながら遠くにいる何かに手を振った。幸せそうなのうしろすがたを見送りながら、自分の後ろに振り返ると、誰も手を振っていないことに気が付いた時に怒りを感じたといっていた。だが夢想は進化する人がすすめばすすむほど混乱は深まるのさと誰かが言っていたのは生きる意味の消失が原因なのか、それとも過去の塊が今を封じ込めているのかわからなくて、その人の助けにはならないと悟った時に仕事にだけ熱中して人と関わらずに済めばな、と願った。仕事の場でああなたはサービスの機械だった。だから笑顔でにこにこしていれば、お客様たちはそれを受け入れてくれた。そこにあるのは機械

と人のコミュニケーションだった。だから自分は何時まで機械だ。だから人と人のコミュニケーションから逃れることが出来たのだ。これもまた一つの夢の形。夢想は深まっていく。

やがて物にすがっていても人と離れすぎることには落ち着かなさを感じてそれに縋っているのがむしろ辛くなってしまった寂しい人は、立ち上がって何かを求めようと瞳を動かしたが、そこにあつたのは全て不透明な現実だけで何もかもが恐怖の形をしていた。微笑みは嘲笑で、真顔は怒りだった。だから立ち上がったまま動かなかつた。そしてまた機械となれば良いという逃げ道に逃げるしかなかつたら、仕方が無い、と誰かに何かに寂しさをぶつけながら自らが人と接する時は機械となり、物と接する時は唯一人となつた。人となつたときだけ自分がそこにいた。ただ相手は物だから何も返事はしてくれない。機械の時は人に尋ねる言葉も答える言葉も全てはプロگرامミングされているものに過ぎないから、人の言葉ではなかつた。だから、いつになつても逃げていられた。それをすればするほど自分は逃げていられた。世界はどんどん不透明さを増し、だけど透明なようでもあつた。空白のようでもあつた。点滅しているそれはいつ滅んでもおかしくないほどにあやふやなのに、ひたすらにそこに存在していて消えてくれない。寂しさのあまりに、誰かに縋りたいと心の奥底から願つた時には、もう、縋り方も忘れていた。

何の話をしたかつたのか、何を話していたのか、もう忘れてしまつて疲れてしまつてひたすらに抜け道を探すことにも疲れてしまつて、そこに残つたのは点滅する世界だけだった。

人は座つてから天を仰いで、雲を掴んでそれを食べた。

甘味も無い。綿飴のような甘味は無い。

形は同じでも、過去はもう訪れない。雲は無味を口の中に広げるだけ広げて架空となつて消えていく。

世界はその人にとっての、フィクションだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7675q/>

空しい人

2011年11月12日20時46分発行